
終焉の理由

木立久美子

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

終焉の理由

【Nコード】

N5356C

【作者名】

木立久美子

【あらすじ】

「あなたには出会いたくなかった」：図書室で、1人の少女が、木更津淳と対峙する。小説「終焉のシナリオ」裏話です。だいぶ病んでいますのでお気をつけて。

目があった瞬間、どうしてすぐに逸らさなかったのか。

「沢野暁美さん」

「…はい」

「僕のこと、知ってる？」

「知らない方が、おかしいでしょう」

「木更津くん」

始まりは、黄昏の図書室。

夢見がちな少女達にとっては、これ以上ないシチュエーションなのだろうけれど。

でも、私は違う。

出来ることなら、彼に出会いたくはなかった。

彼にだけは。

終焉の理由

「今まで話したことなかったよね。同じ寮生なのに」

「…男子寮と女子寮は違いますから」

「沢野さんって、寮長なんだよね」

「そうですね、何か？」

「いや。意外だと思って」

「そうかしら」

「うん。あまり他人に興味なさそうだし。権力とか、上に立つこと
に対しても、あんまり執着しないタイプに見える」

「…」

「図星？」

「さあ」

言葉の1つ1つがやわらかく、それなのに無機質で、鋭く尖って
いるような気がした。

木更津淳。

彼のことは、よく知っている。

たぶん彼も、私のことを知っていたはずだ。

ただ、お互い言葉を交わすことは、ほとんど無かった。

そのときまで。

「君、さ。観月さんが好きなんですよ」

クスクスと笑いながら放たれた、まるで胸をえぐるように鋭い言
葉。

尋ねるのではなく、確認するような。

すぐさま否定することが出来なかった私は、多分、馬鹿だったの
だと思う。

「やめておいた方がいいよ」

制服姿なのに、なぜかハチマキ着用。

「…それ、長すぎじゃないですか」

「人の話ちゃんと聞こうよ」

図書室には私と彼の2人しかいなかった。

いや、司書の先生がいるにはいたが、遠く離れたカウンターの椅子に座ったまま仕事に没頭していらしたものだから、ほとんどいいも同然なのである。

私は小さく溜め息を吐き、彼…木更津君に向き直った。

「何を、やめると言うんです」

「白々しいね。わかってるんだろう」

「さて…何のことやら」

「観月さんを好きでいること、やめた方がいいと言ったんだよ」

「…なぜ」

目を見開いて見つめると、彼は再び「くすくす」と笑った。

中学生男子としては不似合いな笑い声だけれど、彼の場合はなぜか違和感がない。

少しだけ、観月さんに似ていると思った。

やわらかな話し方とか、それでいて氷のような冷たさも兼ね備えたところだとか。

全く違うはずなのに、なぜか重なった。

本当に、ほんの少しだけ。

「なぜ、って？」

彼のうしろに、夕日を映した窓がある。
その光を背に負って、木更津君は目を細めて言った。

「僕の台詞だよ。なぜ、君がそれを訊くの。…一番わかっているのは、君のはずだよ。沢野さん」

「…」

「黙らないでよ。卑怯者」

「なんですって…」

「卑怯だと言ったんだよ。逃げないでよ。僕の言葉に、ちゃんと応えて」

「…いやよ。卑怯なのは、あなただわ。どうして。ずっと目を背けて、必死で忘れようとしていた事実を…なぜ、無関係のあなたに突きつけられなければならないの」

「…ああ。やっぱり、わかっていたんだ」

「近寄らないで」

反射的に後ずさると、背に本棚が当たった。硬い感触。

高い本棚の陰に入った私は、よりいっそう逃げ場所を狭められていた。

「どうして、そんなことを言うんですか。人の心をとやかく言う権利が、あなたにあるとでも？」

「いや。無いかもしれないね」

「じゃあ、黙って」

「黙らない」

ずっと前から予感をしていた。

だから彼を避けていたのに。

ああ、馬鹿だ。私は。

よりによって、こんなところで捕らえられてしまったなんて。

逃げ場がない。

「観月さんの目的を知っているだろう。僕らはトップを目指すんだ。そのために集められたんだから。…わかるだろう。僕は、君のためを思っ言ってるんだよ。半分はね」

「余計なお世話です。…もう半分は、自分のためなんでしょう」
「…名答」

まただ。

くすくす笑う彼の声が、やけに冷たい。

「あのね。観月さんも、君のことが好きらしいよ」

心臓が跳ねた。

「だからこそ、君は身をひいた方がいい」

やめて。

「終わりにしなくちゃ。恋だとか愛だとか、のめりこむほど苦しくなる。観月さんくらい強い人でも例外じゃない。だから、」

やめて。やめて。お願いだから。

「…君には、観月さんの重荷になって欲しくない」

ああ。だから。

彼には出会いたくなかったのに。

木更津君が奢ると言ってくれたので、寮に帰る途中で、自動販売機でジュースを買った。

ひんやりと冷たい缶を、ベンチへ座った私の手に押しつけて、木更津君は言った。

「ごめんね」

「…何を今更。悪かったただなんて思っていないでしょうに」

彼の前で涙をこぼすわけにはいかなかったから、私はあえて顔を上げていた。

俯いたら、もう二度と前を向けない気がしたから。

「沢野さん」

「はい」

「さっき、僕が言ったことだけどさ」

「…どれですか」

「君のためを思って言ってるんだよ、ってヤツ。あれ、本当だからね」

「わかって…います」

「そう。なら、いいんだ」

日が沈んでいく。

茜色が、紫になって、藍になって、そうしてやがては黒くなる。何も見えなくなるくらい闇が襲いかかる。

そろそろ帰ろう、と。

木更津君に言われて、私はようやく立ち上がった。

帰りたくないけれど帰らなければならぬ。私は寮長だ。門限を破るわけにはいかない。

空になった缶を近くのゴミ箱に放り込んだら、からん、と妙に綺麗な音が鳴った。

「僕たち、結構、似てると思うんだ」

「…そうかしら」

「気も合うと思うし」

「…そう…かしら…？」

「うん。だから、ずっと、友達になりたいと思ってたんだよ。なのに、沢野さんが僕を避けるから、面白くなかった」

「…しょうがないじゃないですか…」

「どうして」

「…」

本日十数回目の、溜め息がこぼれた。

「同族嫌悪、ってヤツですよ」

寮の敷地に着くと、じゃあまた明日、と言って木更津君と別れた。女子寮と男子寮は、近いけれど別々の場所だから。

「僕が君に言ったこと、観月さんには内緒にしておいて」

そう言い残して走り去る木更津君の背中には、真っ赤なハチマキが揺れている。

やっぱり、あれは長すぎじゃないか。

私はそんなことを考えて、再び溜め息を吐き出した。
現実逃避だと言うことは、充分すぎるくらい解っていた。

『やめておいた方がいいよ』

『一番わかっていているのは、君のはずだよ。 沢野さん』
『逃げないでよ』

『観月さんの目的を知っているだろう。 僕らはトップを目指すんだ。 そのためを集められたんだから』

『君の事を思っ言ってるんだよ』

『…君には、観月さんの重荷になって欲しくない』

わかっている。

わかっている。

彼と、ずっと共に在りたいと。

そんなことを願ってはいけなかったのだと。

愛だとか恋だとか。

そんなもの、崇高な目的を持つ彼にとっては、邪魔な思いではないのだと。

終焉の理由

「みづき、はじめ」

初めてその名前を見たとき、なぜか心が躍った。

運命ではない。これは必然なのだ。なぜか直感的にそう思った。観月さん。

私はあなたが好きです。

だから、せめて。

終わりの言葉を告げるのは、あなたであって欲しかったのに。

『僕たち、結構、似てると思うんだ』

多分あれは、彼なりの心遣い。

何の慰めにもなっていなかったけれど。

女子寮の自室に帰った私は、1人ベッドに倒れ込むと、声を殺して泣いた。

自分が情けなくて、弱い人間になってしまったような気がして、悔しかったけれど。

仕方ない。

人間なんて、そんなもの。みんな弱いものなのだから。

「どうして。どうして…どうして！」

心の中で、泣き叫ぶ自分の声を、他人事のように聞いていた。

下らない自問自答。

どうして、なんて愚問だ。

木更津君の言うとおり、自分が一番わかっているはずなのだから。

それでも涙は止まらなかった。

「観月さん。観月さん。観月さん。観月さん……」

身をひけ、と。

せめてそれが、あなたの言葉であつたなら。

愛しい愛しい、あなたの声であつたなら。

「耳を塞ぐことも出来たのに！」

“似たもの同士”の彼の言葉では、まるで自分自身に言われたよう
うで。

それではもう、拒絶しようがないではないか。

「…木更津くん」

やっぱり、あなたに出会いたくはなかった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5356c/>

終焉の理由

2009年3月24日10時39分発行